

経済・金融 フラッシュ

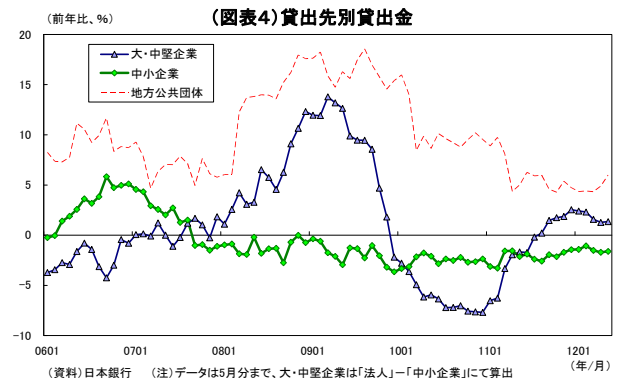
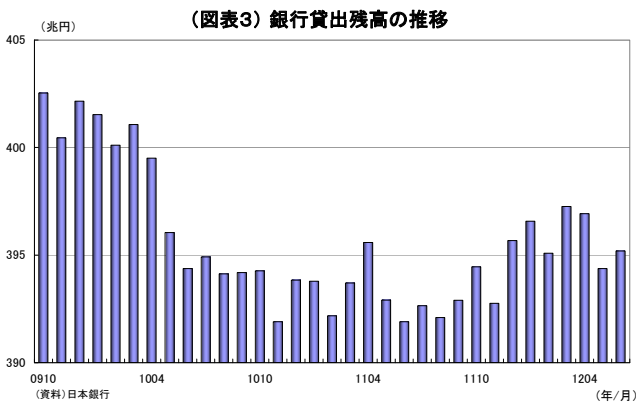
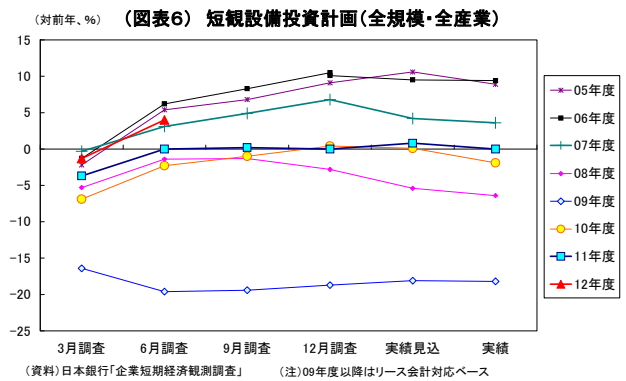
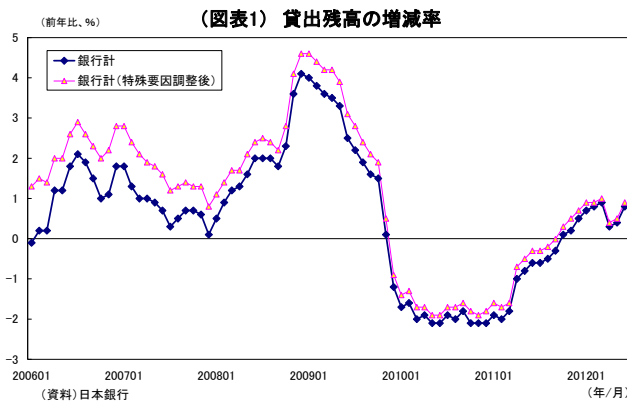
6月マネー統計 ～投資信託が過去最大のマイナスに

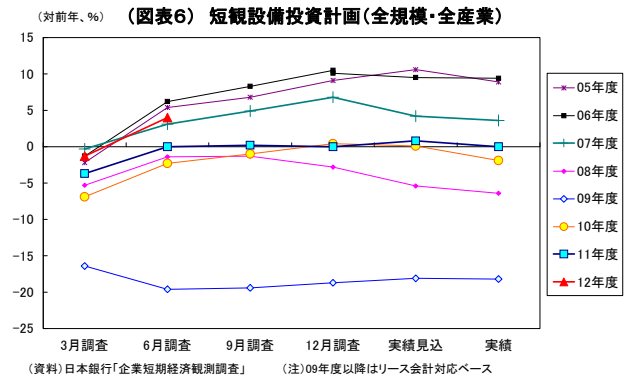
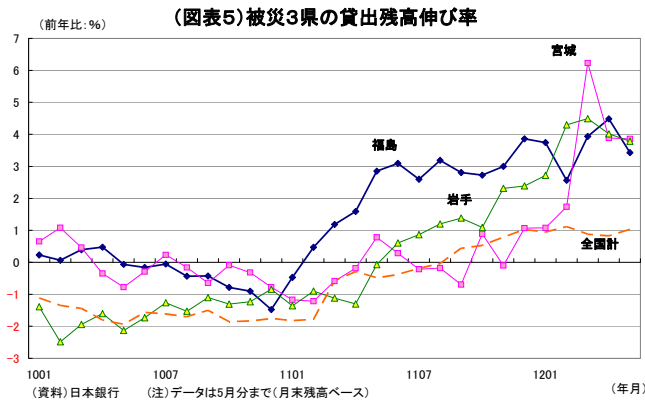
経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 貸出動向：9ヵ月連続の前年比プラス

日銀が発表した6月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行総貸出(平残)の前年比伸び率は0.8%と前月(同0.4%)から伸び率が拡大した。業態別で見ると、地銀が前年比2.3%増(前月は同2.1%増)、都銀等が同0.7%減(前月は1.3%減)と、依然として都銀はマイナス圏ながら今回マイナス幅がかなり縮小した。盛り上がりは欠くものの銀行貸出は緩やかな増加基調にあり、従来同様、「電力会社向け融資」、「M&A 資金」、「復興関連需要」の3本柱が寄与しているとみられる(図表1～5)。

なお、7月2日に公表された日銀短観6月調査における企業の12年度設備投資計画は、前年比4.5%増と近年まれに見る明確なプラス、かつ3月調査からの上方修正幅も大きめとなった。これまで長らく抑制されてきた反動などが反映された可能性がある。あくまでも計画ベースではあるが、計画が実行に移されれば資金需要が喚起され貸出の本格回復要因ともなり得るだけに、動向が注目される(図表6)。



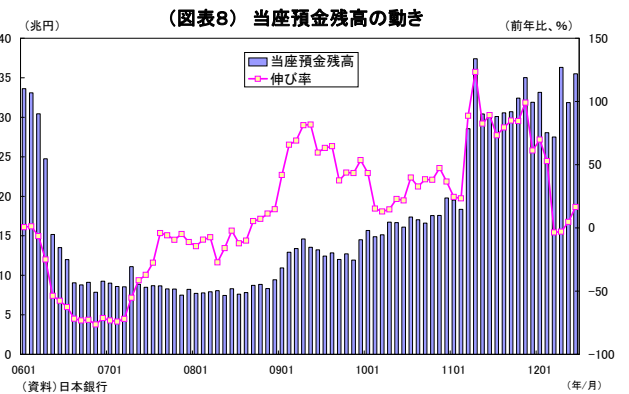
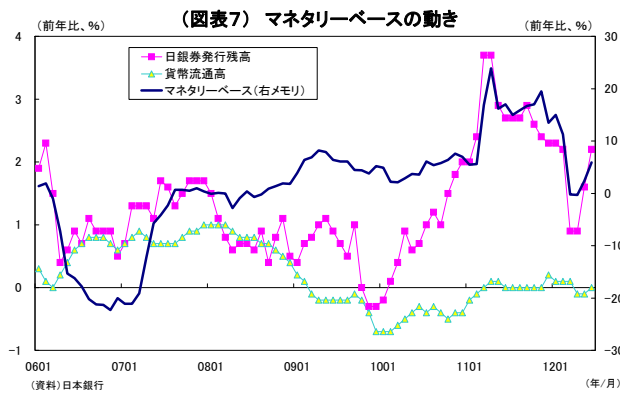


2. マネタリーベース： プラス幅を拡大、過去3番目の高水準

日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す6月のマネタリーベース(平残)伸び率は前年比 5.9%(前月は同 2.4%増)と、プラス幅を拡大。日銀当座預金の伸び率が前年比 16.5%(前月は同 4.7%)と拡大した影響が大きい(図表 7,8)。季節調整済み前月比年率で見ても 55.8%増と大きく拡大している。

水準としても、マネタリーベース残高 120.2 兆円、当座預金残高 35.5 兆円はともに過去3番目の高い水準。さらに単日ベースだと 6 月 26 日に当座預金残高が 43.5 兆円と過去最高を記録した。

この背景には資産買入れ等による日銀の潤沢な資金供給がある。今後とも買入れが進んでいくことは確実であり、これに伴う資金供給によってマネタリーベースは高水準かつ前年比プラスで推移する可能性が高い。

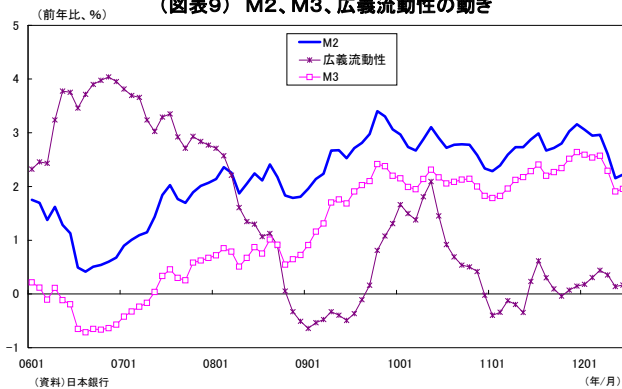


3. マネーストック： 投資信託が過去最大のマイナスに

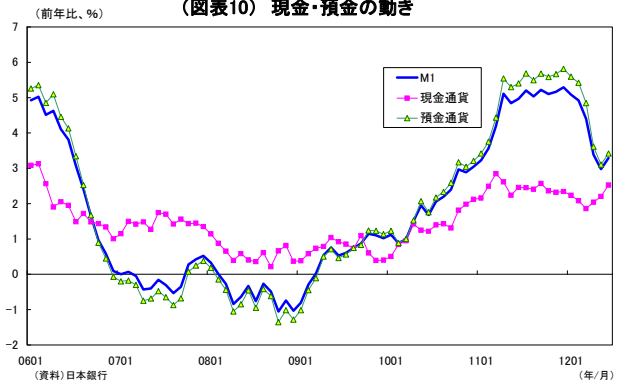
通貨供給量の代表的指標である 6 月の M2 (現金、国内銀行などの預金) 平均残高は前年比 2.2%増(前月改定値も同じ)、M3 (M2 にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む) は同 2.0%増(前月は 1.9%増)と、前月からほぼ横ばい。M3 に投信や外債などを含めた広義流動性も同 0.2%増(前月改定値は 0.1%増)と前月同様わずかなプラスに留まった。

内訳を見ると、資金流入が鈍っていた預金通貨（普通預金など）への流入が6月には再び加速。一方で、投資信託（元本ベース）は前年比▲2.5%と統計が遡れる04年4月以降最大のマイナス幅を記録している。6月は欧州問題を巡って緊迫した情勢が続き、主要国経済の減速感も強まったことから、資金の流れがリスク回避傾向を強めた可能性がある（図表9～12）。

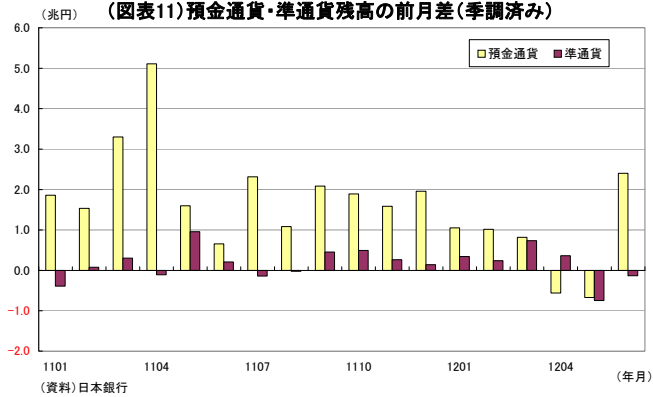
（図表9） M2、M3、広義流動性の動き



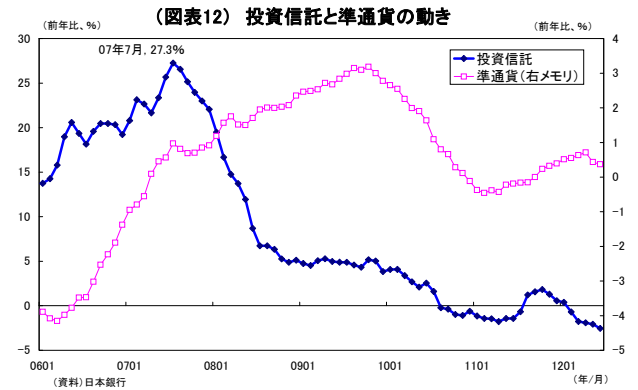
（図表10） 現金・預金の動き



（図表11） 預金通貨・準通貨残高の前月差(季調済み)



（図表12） 投資信託と準通貨の動き



（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。